

社団日本心理学会研究集会等助成金成果報告書

| | | | |
|-----------------|--|----|----------|
| 代表者氏名 (ふりがな) | 山崎 晃男 | 所属 | 大阪樟蔭女子大学 |
| 研究集会等名称 | 日本心理学会聴覚心理学研究会 日本心理学会第74回大会ワークショップ | | |
| 成果概要 | <p>1) 参加人数 (会員・非会員及び認定心理士の人数を記載してください)</p> <p>会員 10名 (うち認定心理士 名) 非会員 1名 (うち認定心理士 名)</p> <p>2) 集会等の目的・成果等 (実施内容・成果・将来計画等を用紙範囲内に記載してください)</p> <p>聴覚の研究には、聴覚の生理心理学的研究や刺激と反応に関する精神物理学的研究、音響心理学的研究のみならず、認知、感情、発達、文化など幅広い分野の研究が関係している。このような心理学の様々な分野の研究者に加え、工学や医学など他分野で聴覚心理学を研究している研究者、マルチメディアの分野で音の研究を行っている研究者、広く社会の動向をとらえようとしている研究者も交えて研究会やワークショップを開催することにより、より広い観点からの討論を行い、聴覚心理学の発展に寄与することが期待できる。</p> <p>日本心理学会第74回ワークショップにおいては、さまざまな生活環境を対象とした社会調査の方法論とその意義について、以下の話題提供が行われた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・公共施設に関する生活環境の満足度調査から、回答者の判断の傾向について分析した (桐朋学園芸術短期大学 羽藤 律) ・コンサートやヘッドホンステレオなどの娯楽音の実態調査と一過性聴力損失などの関係を検討した調査について紹介 (大阪大学 青野正二) ・空港に隣接する公園に関する調査から、社会調査の有効性について考察 (防衛施設周辺整備許可協会 森長 誠) ・生活環境に関する社会調査の基本項目の標準化について考察 (大阪大学 桑野園子) <p>また、大阪大学の難波精一郎名誉教授が指定討論を行い、社会調査の適応限界や信頼性、妥当性について論じた。</p> <p>フロアを含む論議の結果、社会調査が聴覚と関連した騒音などの研究に非常に有効であるとともに、今後、様々な場面で用いられる社会調査の標準化が目指されるとの合意に至った。</p> <p>次年度は、ストックホルム大学のペトリ・ラウカ准教授を招いて、音声と音楽の感情表現をテーマとした研究集会の開催を計画している。</p> | | |